第二講　文化構想学部　認識論・科学論

次のA・B二つの文章を読んで、あとの問いに答えよ。なおAはBを踏まえて書かれたものである。

A

パリとロンドンを往復したたくさんの書簡において、熊楠(くまぐす)が書いていることの中でも、もっとも重要なのは、イ事という概念をめぐる彼の思考である。ここには、とても現代的な思考法を、みいだすことができる。熊楠はその考えを、まず自分の考える学問の方法論として、語り出している。

熊楠の考えでは、1事は心と物がまじわるところに生まれる。たとえば、建築などというものも、事である。その場合、建築家は自分の頭の中に生まれた非物質的なプランを、土や木やセメントや鉄を使って現実化しようとするだろう。建築物そのものは物だけれども、それは心界でおこる想像や夢のような出来事を実現すべくつくりだされた。つまり、それはひとつの事として、心と物があいまじわる境界面のようなところにあらわれてくる現象にほかならないことになる。

このプロセスは、もっと精密に研究してみることもできる。建築家は設計図を描く。そして、その設計図をもとにして、建築の物質化が実行される。このときの設計図もまた、事なのである。設計図は、建築家の頭の中に浮かんだアイディアを、明確な構造をもった透視法の中に定着させるものだ。ここでは「設計図の描き方」という表現法自体が、アイディアの物質化をたすけている。だから、そこでも心と物が、出会っている。そうなると、建築という行為そのものが、幾重にも積み重ねあわされたロ事の連鎖として、できあがっていることがわかる。記号や表象が関係しているものは、こうして考えてみると、すべて事なのだということが、はっきりしてくる。

いまの学問にいちばん欠けているものは、このハ事の本質についての洞察だ、と熊楠は考えた。彼の考えでは、純粋なただ心だけのものとか、純粋にただ物だけのもの、というのは、人間の世界にとっては意味をもたず、あらゆるものが心と物のまじわりあうところに生まれる事として、現象している。しかも、心界における運動は、物界の運動をつかさどっているものとは、違う流れと原理にしたがっている。このために物界では、因果応報ということが確実におこるのに、純粋な心界でも因果応報がお

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

こるとは限らないのだ。たとえその人の心に悪い考えがおこったとしても、その考えが物界と出会って、そこにたしかな[ニ]事の痕跡をつくりだし、物界の流れの中に巻き込まれてしまうことがなかったとしたら、そのことだけでは、けっして将来に報いをつくりだすとは限らない。

事は異質なものの出会いのうちに、生成される。そして、[2]その事が、ふたたび心や物にフィードバックして働きかける過程の積み重ねとして、人間にとって意味のある世界は、つくりだされてくる。熊楠はこの事の連鎖の中から、ひとつの原則がみいだせるはずだと考えた。

ここで熊楠が考えていることは、とても大きな現代的な意味をもっている。まず彼は、人間の心の働きが関係するいっさいの現象についての学問にとって、いちばん重要な意味をもつのは事であるけれども、この事は対象として分離することができない構造をもっている、と言っているのだ。心界におこる動きが、それとは異質な物界に出会ったとき、そこに事の痕跡がつくりだされる。しかし、その事はもともと心界の動きにつながっているものだから、心界の動きである知性には、事を物のように対象化してあつかうことはできないのだ。しかし、その分離不可能、対象化不可能なダイナミックな[ホ]運動である事をあつかうことができなければ、どんな学問でも、自分は世界をあつかっているなどと、大口をたたくことはできなくなるわけだ。

ここには、二十世紀の自然科学が量子論の誕生をまって、はじめて直面することになった「観測問題」の要点が、すでに熊楠独自の言い回しによって、はっきりと先取りされている。心界から独立した、純粋な物界などというものは存在できない。観測がおこなわれるときには、かならず人間の意識の働きが関与している。つまり、どんな物質現象でも、それが人間にとって意味をもつときには、すでに物ではなく、心界と物界の境界面における事として現象しているために、決定不能の事態に陥ってしまうのだ。量子論は[3]パラドックスに満ちた事の世界を記述するための方法を、いまだに探求しつづけている。熊楠は量子論が生まれる三十年も前に、事としてつくりだされる世界の姿をとらえ、それをあきらかにするための方法を、模索しだしていた。

（中沢新一（なかざわしんいち）『森のバロック』による）

注　熊楠……南方（みなかた）熊楠（一八六七～一九四一）。紀州和歌山生まれの生物、民俗、博物学者。
観測問題……観測対象は観測によってその状態を変化させることが量子力学（量子論）で明らかにされ、自然科学における観測の位置づけが問われた問題。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

B

電気が光を放ち、光が熱を与うるごときは、物ばかりのはたらきなり。今、心がその望欲をもて手をつかい物を動かし、火を焚いて体を暖むるごときより、石を築いて長城となし、木をけずりて大堂を建つるごときは、心界が物界とまじわりて初めて生ずるはたらきなり。電気、光等の心なきものがするはたらきとは異なり、この心界が物界とまじわりて生ずる事ということにはそれぞれ因果のあることと知らる。その[4]事の条理を知りたきことなり。今の学者、ただ箇々のこの心この物について論究するばかりなり。小生は何とぞ心と物とがまじわりて生ずる事によりて究め、心界と物界とはいかにして相異に、いかにして相同じきところあるかを知りたきなり。

科学のみで今日まで知られたところでは、輪廻（りんね）ということはたしかにあるごときも、科学のさわること能わざる心界に輪廻行わるるや否やという問いには、実に答えに苦しむ。何となれば、小生今日悪念を生じたりとて明日別にこれがために懊悩せず。多くは忘れ終わるものなり。されば物界に生ずる、これこれの水をこれこれの温度にたけば、これこれの蒸気を生じてこれこれの大いさの物を動かすというとは異なり、心界に生ずる現象はあるいはつねに報（むくい）あらぬものにやとも思わる。これをきわむるには、小生一人の心できわむるよりほか仕方ないが、右に申すごとく、心界中のみには輪廻ということは、たしかに小生には見えぬ。

すなわち石が墜（お）ちて瓶（びん）にあたれば、石が因となりて瓶を破るように、今日小生善を思いたればとて、別に思うただけの報を思うものにあらず。また悪念を起こせりとて、別に後日これがため悪事を念（おも）うということもなく、ただ一座なりのようにも思う。ただ心界に感ずる因縁応報というは、心界が物界に接して作用（事）を生ぜし上のことで始めてあらわるるものと思う。すなわち小生が人の物ぬすむは、小生の心が手をつかいて物をぬすむという作用を現出するなり。その返報としては、あるいは小生が人（小生より見れば物）でどやさるること等あるべし。この物心両界が事を結成してのち始めてその果を心に感じ、したがってその感じがまた後々の事の因となるなり。

（南方熊楠「土宜法竜宛書簡」による）

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

問１　Ａの文章中の傍線部１に「事は心と物がまじわるところに生まれる」とあるが、その例をＢの文章の内容に即して求めるとすれば、もっとも適当なものはどれか。次の中から選べ。

イ　電気が光を放ち、光が熱を与うること

ロ　心がその望欲をもて手をつかい物を動かすこと

ハ　今日悪念を生じたりとて明日別にこれがために懊悩せざること

ニ　これこれの水をこれこれの温度にたけば、これこれの蒸気を生じてこれこれの大いさの物を動かすということ

ホ　石が墜ちて瓶にあたれば、石が因となりて瓶を破るようなこと

問２　Ａの文章中の傍線部２「その事が、ふたたび心や物にフィードバックして働きかける過程の積み重ね」と同じ趣旨のことを述べている一文をＢの文章中に求め、その最初の五文字を抜き出して記せ（句読点があれば、それも一字に数える）。

問３　Ａの文章中の傍線部３「パラドックスに満ちた事の世界」の解説としてもっとも適当なものはどれか。次の中から選べ。

イ　その世界では、人間にとって観察の対象となる物は、観察者の心と分離することができないため、観察に際しては、かならず心の状態を一定に保つことが求められる。

ロ　その世界では、人間にとって観察の対象となる物は、かならず心の側面と物の側面とに分離して考察されるために、ひとつに統合された対象としては扱えなくなる。

ハ　その世界では、人間にとって観察の対象となる物は、かならず異質なものの出会いのうちに生成されるために、ほかの諸物と比較しなければ客観的観察は難しくなる。

ニ　その世界では、人間にとって観察の対象となる物は、かならず観察者自身の心が関与する事として現われるため、観察者から独立した物として対象化できなくなる。

ホ　その世界では、人間にとって観察の対象となる物は、かならず観察者の心の干渉を受け、事の連鎖のうちに投げ込まれるため、観察者は物を事から切り離す必要がある。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

問４　Ｂの文章中の傍線部４「事の条理」に相当するもっとも適当な語句をＡの文章中の波線部イ〜ホより選べ。

問５　次の文は、いずれもＡの文章中で熊楠の主張として述べられている内容である。このうち、Ｂの文章中では述べられていないものを一つ選べ。

イ　事は心と物があいまじわる境界面のようなところにあらわれる。

ロ　いまの学問にいちばん欠けているのは、事についての洞察だ。

ハ　人の心に悪い考えがおこったとしても、その考えが物界と出会わなければ、将来に報いをつくりだすとはかぎらない。

ニ　心界におこる動きが、それとは異質な物界に出会ったとき、そこに事がつくりだされる。

ホ　心界から独立した純粋な物界などというものは存在できない。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

第二講　知識モノ解説

文学史・人物解説

●筆者　中沢新一＝なかざわ　しんいち（一九五〇〜）山梨県生まれ、東京大学文学部宗教学専攻卒。同大学院やチベット留学を経て、現代思想（ポストモダン）、ニューアカデミズムの旗手と評されてきた。宗教人類学者

語句

書簡＝しょかん→手紙

表象＝ひょうしょう→イメージや心の中に浮かべるもの、シンボル。本文では形を得た表現作品といった意味で使っている

フィードバック→電気回路では、出力の一部を入力にもどすこと。増幅装置に使われるしくみ。一般的には、ある原因から生じた物事の結果が、再び原因に作用して新しい結果を生むこと。さらに、学習や仕事でも使います。たとえば、テストの成果や仕事の成果をチェックしてそのよい点や悪い点を分析し、次回のテストや仕事につなげることです

懊悩＝おうのう→深く悩んで苦しむこと

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

復習問題　第二講

次の傍線部にあたる漢字を、次の各選択肢から選びなさい。

（ア）作家の書カンを公表する　①問　②観　③巻　④簡　⑤勘

（イ）セイ密な設計図を描く　①聖　②精　③征　④清　⑤晴

（ウ）トウ視図法による表現　①塔　②等　③到　④投　⑤透

（エ）因果オウ報がおこる　①応　②追　③欧　④往　⑤押

（オ）事件のコン跡を残す　①紺　②根　③困　④痕　⑤恨

（カ）学問の方法を模サクする　①策　②索　③作　④錯　⑤削

（キ）人生に懊ノウし苦しむ　①能　②脳　③悩　④濃　⑤納

（ク）優れたドウ察力を発揮する　①同　②洞　③動　④導　⑤胴

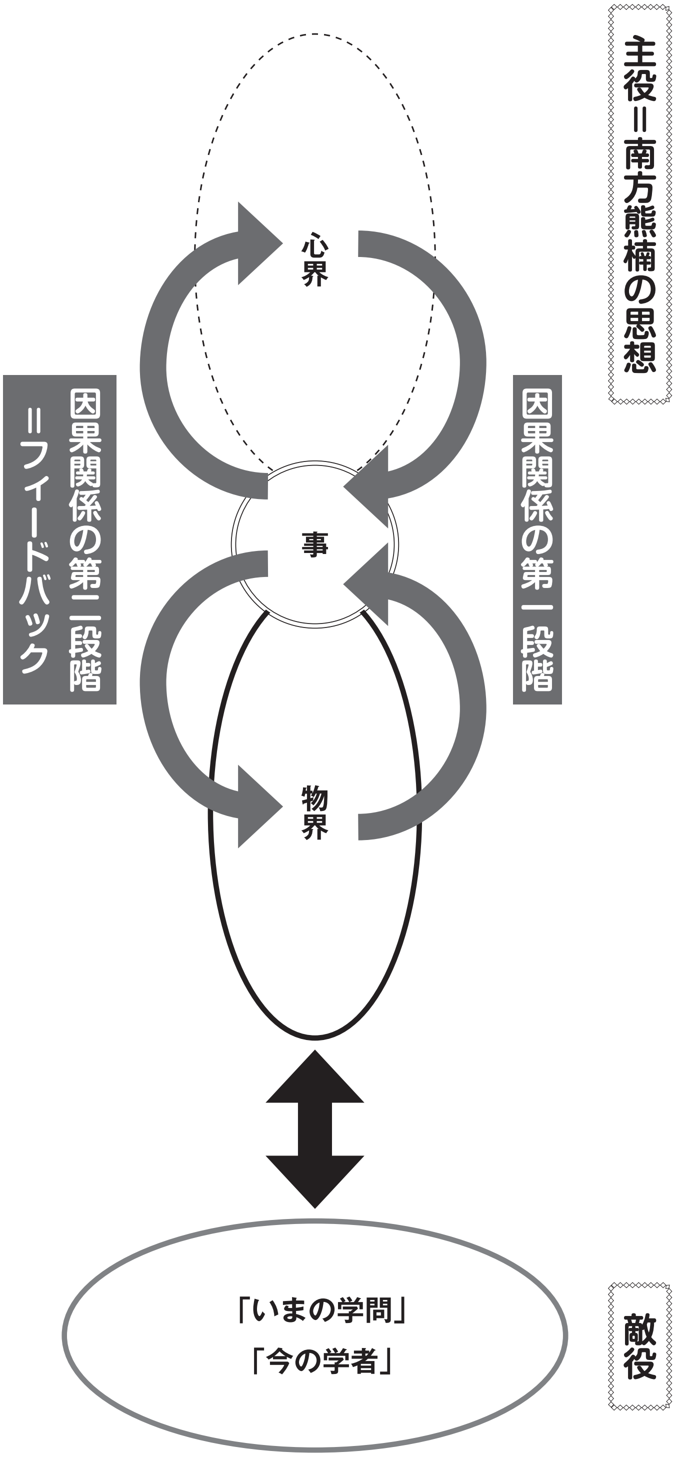
（ケ）量子論の観ソク問題に挑む　①則　②即　③捉　④促　⑤測

（コ）出来事が連サしていく　①差　②査　③作　④鎖　⑤唆

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

第二講　文化構想学部　認識論・科学論

《本文の対比構造》



© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

《解説》

関連した複数の文章を一度に読ませるのは、文化構想学部だけの大きな特徴です。

問１《傍線部説明・選択肢》

いきなりこの文章の中心、核心部分です。心単独でもなく、物単独でもなく、両者がまじわるところが「事」です。《本文の対比構造》をご覧ください。実は、南方熊楠自身がこれと同じような図をスケッチしています。Aの文章では、傍線部の直後に具体例があります。それによると「自分の頭の中に生まれた非物質的なプラン」は「心界」にあるもの、「土や木やセメントや鉄」は「物界」にあるもの。それらが別々にあるかぎり、建築は生まれない。両者が「あいまじわる境界面」にあらわれる現象が「事」であり、建築も「事」である、というわけです。これと似た事例をBの文章中に求めるのが、この問１の設問条件です。

するとイ「電気が光を放ち、光が熱を与えること」、ニ「これこれの水をこれこれの温度にたけば、これこれの蒸気を生じてこれこれの大いさの物を動かすということ」、ホ「石が墜ちて瓶にあたれば、石が因となりて瓶を破るようなこと」は、すべて「物界」だけのこと。部分的指摘の誤りと呼んでもよいですし、動画講義ではカラーリングを変えてますから、対比混乱の誤りと呼んでもOKです。一方、ハの「今日悪念を生じたりとて明日別にこれがために懊悩せざること」は「心界」のみのことです。これも部分的指摘の誤り、もしくは対比混乱の誤りです。頭で思い描くだけなら犯罪という「事」、事件を構成しないというわけです。ああ、よかった。両方そろって「事」を成すのは、ロ「心がその望欲をもて手をつかい物を動かすこと」です。

問２《傍線部説明・抜き出し》

傍線部の直前にあるように、「事は異質なものの出会いのうちに、生成される」わけですが、それっきりでは終わらずに、その後も相互影響して、「連鎖」していきます。つまり、心と物の出会いで、なんらかの出来事を成し、その出来事を見て、さらに心に浮かぶものがでてきて、手に物を取って行動に移すということがあるよ、という意味です。詳しく言うと、物と心が出会って、これが原因で事という結果が生じる、これを〝因果関係の第一段階〟としましょう。さらにこの後、「事」という結果から心が動き、また物とセットになって新たな「事」を成す原因となる、これを〝因果関係の第二段階〟としましょう。傍線の「フィー

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

ドバック」はこの〝因果関係の第二段階〟を指しています。さて、「フィードバック」なんていかにも現代人が使いそうな外来語ですが、これを古い文体のＢから探すのが問２の設問条件です。

Ｂの文章は、文体こそ古いですが、具体例だらけです。最終段落もそうで、「石」「瓶」「ぬすむ」といった具体例の後で、「この物心両界が事を結成してのち始めてその果を心に感じ、したがってその感じがまた後々の事の因となるなり。」とまとめています。この部分が答えになります。「物心両界が事を結成」するだけでなく、傍点を付けたように、その後の因果関係、影響関係つまり〝因果関係の第二段階〟まで書いてあることが決定打です。というのも、「物心両界が事を結成」と同種の表現は、Ｂの第一段落に「この心界が物界とまじわりて生ずる事ということにはそれぞれ因果のあることと知らる。」とありますが、これは〝因果関係の第一段階〟だけです。

この他、「小生は何とぞ心と物とがまじわりて生ずる事によりて究め～」の部分も、「ただ心界に感ずる因縁応報というは、心界が物界に接して作用（事）を生ぜし上のことで始めてあらわるるものと思う。」も同様です。〝因果関係の第一段階〟と〝因果関係の第二段階〟の両方が入って「フィードバック」ですから、〝第一段階〟のみでは部分的指摘の誤りと言えそうです。

問３《傍線部説明・選択肢》

主役キーワードである「事の世界」の説明です。しかも、物理学や量子論の「観測問題」と呼ばれるものも「パラドックスに満ちた事の世界」だと言うのです。「心界」と「物界」の出会う境界面の世界ですから、物だけで分離できない。観測しようとしている人間の意図（心）と分離したところで、物界だけで決定できない（決定不能の事態）ということです。ある部屋の室温を厳密に測定しようと思ったら、測定しようとしている人間の体温が影響してしまう。じゃあ、人間は遠くから観察して温度計だけ置いておく。でも、温度計の電池や液晶画面の微妙な発熱がやはり室温に影響してしまう。つまり、観測したいと思う人間の意図、行為が対象に関与してしまう。室温を測りたいのに〝室温それ自体〟というものを分離して決定することができない、この矛盾を「パラドックス」と呼んでいます。「パラドックス」には〝二重性〟という意味もありますが、この文中では心と物の二重性ということになります。

正解は、「人間にとって観察の対象となる物は、かならず観察者自身の心が関与する事として現われるため、観察者から独立

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

した物として対象化できなくなる」としたニです。ロとホは、それぞれ「分離して考察」「切り離す必要がある」が×。分離できないのです。真っ向から記述に反する誤りです。ハは、まず「異質なものの出会い」と言っておきながら、「ほかの諸物と比較」とやってしまいました。つまり、物と心の出会いというべきところを「物と物」になっています。部分的指摘の誤りです。さらに「〜しなければ客観的観察は難しくなる」としていて、あたかも「客観的観察」を求めているかのような表現です。実際は心＝観察者が参与・関与しないような純粋な客観はない、ということですから、ここは記述に反する誤りです。イはどうでしょう。「観察に際しては、かならず心の状態を一定に保つことが求められる」が笑えます。〝実験は平常心でやれ！〟〝試験管をもつ手がふるえないように深呼吸三回してから実験を開始せよ〟ってな感じです。話が小さくなっています。不当な矮小化の誤りです。現代文ができるようになると、笑える選択肢が増えてきますが、試験中は失笑程度におさえましょうね。

問４《傍線部言い換え・抜き出し》

「事の条理」とありますが、「条理」とは〝筋道・道理〟のことです。詳しく言えば、〝一本筋の通った論理的な説明〟〝詳しい内容〟ということです。したがって、ハの「事の本質」が正解です。これは言葉の意味からだけでなく、次のことから導けます。すなわち「今の学者、ただ箇々のこの心この物について論究するばかりなり」との表現とセットになっていることが決定的な根拠になります。つまり、「今の学者」がわかっていないこと、「いまの学問」に欠けているもの、それが「事の条理」であり「事の本質」です。

他の選択肢もチェックしておきます。イの「事という概念」はどうか。「概念」は、言葉です。言葉自体ではなく、その言葉の意味内容が大事です。やはり「事の本質」のほうがよい。ロ「事の連鎖」、ニ「事の痕跡」は具体例中に出てくる言葉です。具体例は、一段、落ちるです。ホの「運動である事」は、ダイナミックな面もあるという「事」の一面を指しているものです。「事の本質」よりもいいとは言えません。こうした、完全な間違いとは言えない候補もある中から、よりよいものを選択する能力を早稲田の現代文では求めてきます。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

問５《全文の理解・選択肢》

ホの「心界から独立した純粋な物界などというものは存在できない」が正解です。Aは、Bの内容を言い換えて解説するような文章ですが、「二十世紀の自然科学が量子論の誕生をまって、はじめて直面することになった『観測問題』の要点」は、当然、Bでは直接書かれていません。その要点が「心界から独立した純粋な物界などというものは存在できない」です。

他の選択肢をチェックしておきます。イ「事は心と物があいまじわる境界面のようなところにあらわれる」、ロ「いまの学問にいちばん欠けているのは、事についての洞察だ」については、「この心界が物界とまじわりて生ずる事ということにはそれぞれ因果のあることと知らる。その事の条理を知りたきことなり。今の学者、ただ箇々のこの心この物について論究するばかりなり。」と第一段落にありますよ。ハ「人の心に悪い考えがおこったとしても、その考えが物界と出会わなければ、将来に報いをつくりだすとはかぎらない」は、「今日小生善を思いたればとて、別に思うただけの報を思うものにあらず。また悪念を起こせりとて、別に後日これがため悪事を念う（おもう）ということもなく」と最終段落にあります。ニ「心界におこる動きが、それとは異質な物界に出会ったとき、そこに事がつくりだされる」は、問２の解説で書いたように、いわば心と物の〝因果関係の第一段階〟ですから、あちこちに出ています。

模範解答

問１＝ロ　問２　この物心両　問３＝ニ　問４＝ハ　問５＝ホ

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

復習問題　解答　第二講

（ア）④　（イ）②　（ウ）⑤　（エ）①　（オ）④
（カ）②　（キ）③　（ク）②　（ケ）⑤　（コ）④

解答漢字一覧

（ア）書簡　（イ）精密　（ウ）透視　（エ）応報　（オ）痕跡
（カ）模索　（キ）懊悩　（ク）洞察　（ケ）観測　（コ）連鎖

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。